インフルエンザについて（第13報）

今週は2014年の第12週です。薬局サーベイランスをみると、毎週月曜日ごとの推定患者数は第7週以降減少が続いていましたが、第11週、第12週はほぼ横ばいでした（図1）。一方、1週間ごとの累積の推定患者数では第9週で再び増加しましたが、第10週、第11週と減少がみられました（図2）。小中学校の春休みが始まるまでは、このようなやや減少もしくは横ばい傾向の状況が今しばらくは続いていくと思われます。（図1、図2共に http://www.syndromic-surveillance.net/yakkyoku/yakkyoku_nippou/2013_14/index.html 参照）。

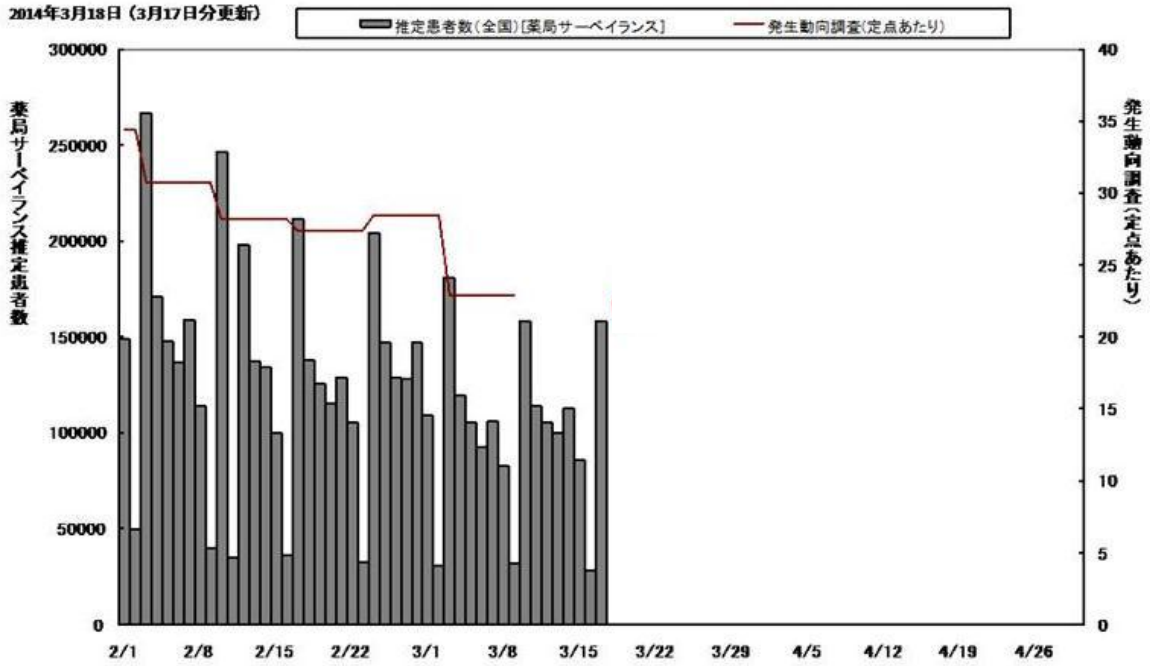

図1. 薬局サーベイランスによるインフルエンザの推計受診患者数の日別推移（2014年1月1日～2014年3月17日）

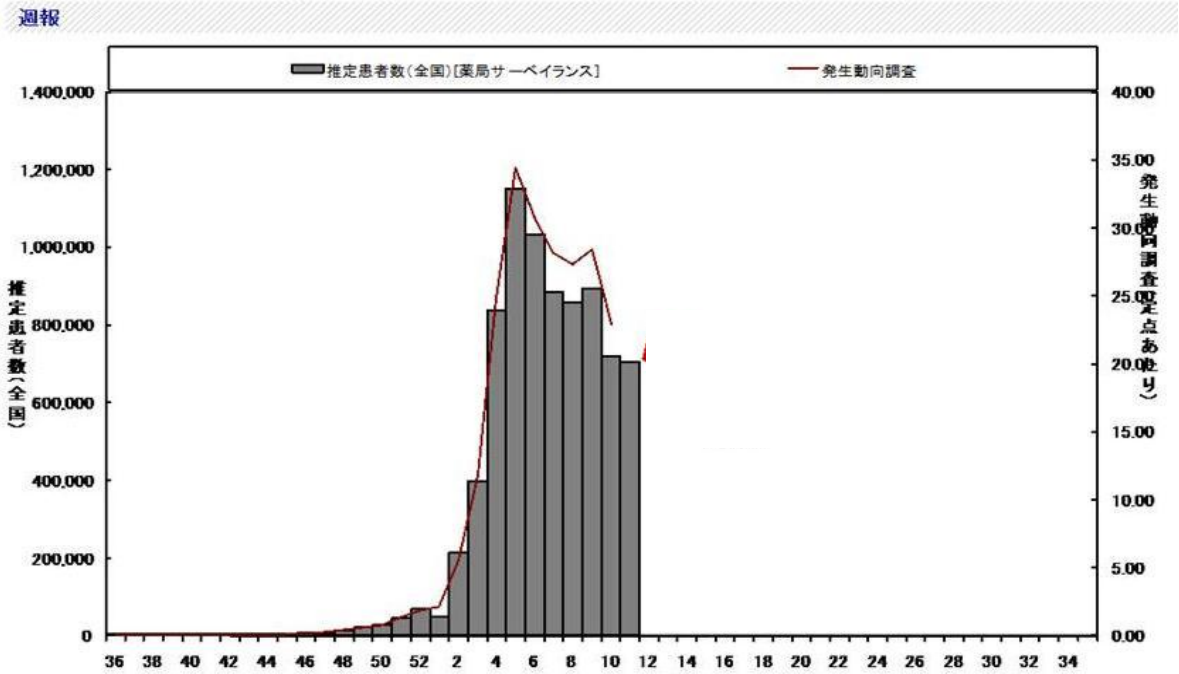

図2. 薬局サーベイランスによるインフルエンザ推計罹患者数の週別推移（2013年第36週～2014年第11週）

インフルエンザウイルスの日本国内の患者由来検体からの検出状況ですが、昨年9月からの、今シーズン（2013/2014年シーズン）を通しての累積の検出数（4,648検体）ではインフルエンザA/H1N1pdm2009（以下A/H1N1pdm）が47.3%と最多を占めており、次いでB型（27.2%）、A/H3N2（A香港）亜型（25.5%）の順となっています（図3）。一方、直近の5週間ではA/H1N1pdm（47.5%）、B型（42.3%）、A/H3N2亜型10.2%の順であり、B型の検出割合の増加が目立っています。

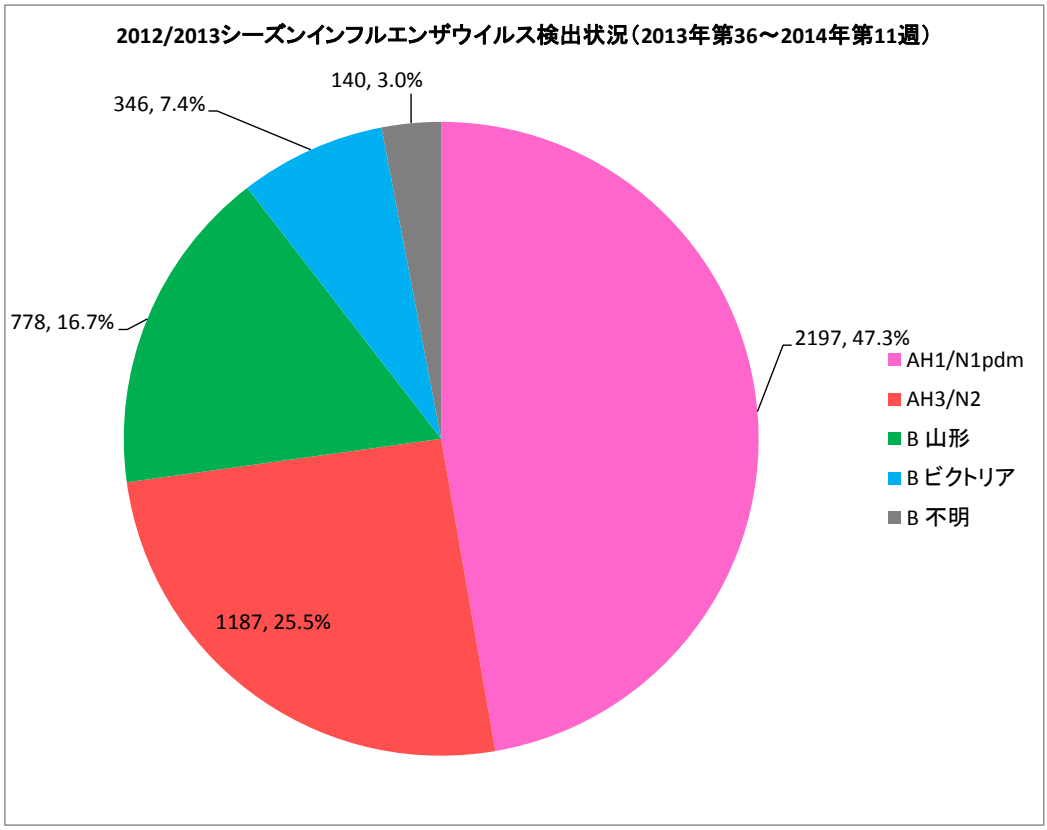

図3. 今シーズンのインフルエンザウイルス検出状況（2013年第36週～2014年第11週）（国立感染症研究所感染症疫学センターホームページ：http://www.nih.go.jp/niid/ja/iasr-inf.html 参照）

今シーズンのインフルエンザの流行は本格化してからはインフルエンザA/H1N1pdm2009が流行の中心であり、例年と同様に2014年第5週が流行のピークとなり、その後患者数の減少がみられたものの、第9週には再び増加し、第10週、第11週と減少は見られたものの全体的には横ばい傾向が続いています。学校や幼稚園の春休み期間となってからインフルエンザの流行が落ち着いてくるかどうか見極める必要があります。

2014年3月18日

大阪府済生会中津病院ICT
安井　良則